

『佛乘禪師東歸集』の基礎的研究

伝自筆本と版本の比較を手がかりに

根 木 優

一、はじめに

五山文学黎明期の禅僧・天岸慧廣（一二七三—一三三五）は無學祖元、高峰顯日に師事し、夢窓疎石の法兄にあたる。在元中には明極楚俊や竺仙梵僊らの高僧を説得し、日本に招来した。その功績は決して軽いものではあるまい。その天岸慧廣による偈頌集『東歸集』は、明極楚俊や竺仙梵僊、夢窓疎石、足利尊氏、足利直義といった当時の名士たちとの交流を知る資料として、また黎明期の日本の五山文芸界に多大な影響を与えた金剛幢下の作風を伝える資料として、その価値は広く世に認められているところである。『東歸集』にはいくつかの伝本が現存しているが、中でも自筆と伝えられる写本は現在、重要文化財に指定されている。近代においては、『東歸集』の版本を徳富蘇峰や鈴木大拙（あるいは石井光雄か）が読んでいた形跡が見られる¹⁾。にもかかわらず、『東歸集』自体の研究はほとんど為されておらず、上村觀光編『五山文學全集』と北村澤吉『五山文学史稿』²⁾に収録される解説、山岸徳平校注『五山文学集 江戸漢詩集』³⁾にわずか四篇、「遊天童」「國清寺」「送僧歸蜀」「過嚴陵臺」の訳注が取り上げられているのみである。そこで本稿では『東歸集』の諸本を調査、その伝本系

統などを明らかにする。また、先に拙稿⁽⁴⁾で現状の伝自筆本の作品配列は、後人の改装によってその原態から離れていることを指摘した。本稿では伝自筆本と版本を比較することによって、版本の方がより『東帰集』の原態に近い作品配列を有しているのではないかという可能性を指摘する。

二、『仏乗禪師東帰集』の本文

『仏乗禪師東帰集』の本文は、大きく分けて二つに分けられる。伝自筆本（鎌倉末～南北朝初）と、それを改訂し刊行した版本（元禄十六年）である。以下、調査した版本（十点）について書誌的な情報を記す。すべて同版本であるため、内題や刊記などと重複するものは省略した。伝自筆本の書誌情報に関しては、拙稿⁽⁵⁾で紹介をしているので、そちらを参照されたい。

国会図書館

一冊

（請求記号）八二一ノ一八八

朱丸・朱傍点入り（三三三丁才）三四丁才）

内題「佛乗禪師東帰集」（以下、すべての版本に同様の内題あり。）

外題「佛乗東帰集 全 張」

「佛乗東帰集 全」は打付け書き。「張」は貼紙。

白椽色無地紙表紙（覆い表紙）

白茶色無地紙表紙（原表紙）

縦二七・〇×横一八・〇cm

四周単辺・無界・一面十行（一行二十字詰）

序文三丁、本文三十八丁、跋二丁

刊記 元禄十六年癸未年／六月望前吉辰／京師二條通書林重兵衛刊行

序文 元禄辛巳歳抄春穀旦／峨山直指澄月潭拜手題

跋文 元禄癸未仲夏日／前主京城大徳比丘宗章拜手敬跋（以下、すべての版本に同様の序跋あり。）

京都大学附属図書館（谷村文庫）

（請求記号）谷村文庫／四 〇七ノト二

外題「東歸集」（題簽）

花浅葱色無地紙表紙

縦二七・〇×横一八・四cm

京都大学電子図書館（貴重資料画像）のホームページ上で、表紙、序跋、刊記など一部の画像が公開されている。
<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>

駒澤大学図書館

(請求記号) 一五二・二 / W六四

外題「佛乘ノ禪師」東歸集」(題簽)

丁字色と象牙色の横刷毛目表紙

縦二四・八×横一七・三cm

駒澤大学図書館

(請求記号) 一五二・二 / W六四 A

外題「佛乘禪師東歸集 全」(題簽)

鉛色無地紙表紙

縦二六・二×横一七・八cm

〔識語〕(表紙右肩に) 元筐

(見返し) 文政元〔戊ノ寅〕臘日ノ求之

裏表紙に「日夏二^(欠換) / 千手寺ノ什木」

近江ノ義虔所持ノ〔文義ノ之印〕

お茶の水図書館(成篋堂文庫)

外題「佛乘ノ禪師」東歸集 完」

後補索引表紙

縦二七・二×横一八・一 cm

他の版本では本文三十八丁ウに刊記があるが、この版本だけは三十八丁ウに何も印刷されていない。本来そこにあるべき刊記は跋文の後に存在している。

(扉に徳富蘇峰による書き込み)

珍書須 愛護ノ是書多年物色今日偶然ノ於神田古書肆所攤書之次ノ獲焉聊以誌喜ノ大正三稔八月十六夕ノ蘇峯学人

(表紙に蘇峰による書き込み) 昭和三稔二月尽ノ蘇峯老人ノ珍籍ノ

識語 見返しに 願成寺藏書〔良迪之章〕の蔵書印

(本文二丁才に)「蘇峰審定」の蔵書印

お茶の水図書館(成篁堂文庫) 無刊記本

外題「東歸集 完」

枇杷茶色無地紙表紙

縦二五・〇×横一九・〇 cm

構成 表紙、原表紙か、序(一丁}三丁ウ)、本文(二丁}三十八丁ウ 刊記の枠あり)、跋(一丁}二丁ウ)、原裏表紙か、

裏表紙 三十八丁ウに刊記の枠だけが存在し、枠内は空白。

(表紙に蘇峰による書き込み) 元禄板ノ珍ノ蘇峰珍襲

(扉に蘇峰による書き込み) 此書於鎌倉建長寺得焉ノ蓋罕靚之珍籍也愛惜至囑ノ明治卅九年三月初八 蘇峰学人

(本文二丁才、右中央に)「長好禅院」の蔵書印。

(本文三十八丁才、中央に)「長好禅院」と「有花斎碩」の蔵書印。

松ヶ岡文庫

外題「佛乘禪師東歸集」(題簽)

左肩に「佛乘禪師東歸集」の題簽があつたと思われるが、すべて欠損。

白茶色無地紙表紙

縦二六・九×横一八・三cm

(表紙右肩に朱書きで)両之箱

長崎県立長崎図書館

(請求記号) 渡辺文庫ノ一八八/E四四

外題「震ノ佛乘東歸集」(題簽)

無地紙表紙

縦二六・九×横一八・二cm

〔識語〕(跋二丁ウに) 明治七戌孟春ノ現住朴州新添ノ濟北山大安禪寺ノ蔵本

報国寺(神奈川県鎌倉市)

外題「佛乘禪師東歸集 全」(題簽)

高麗納戸色無地紙表紙

縦二六・〇×横二〇・〇cm

序文一丁才に「正宗菴」と「恵寧」の蔵書印有り

裏表紙に「澁頭陀ノ所持」の書入れ

東京大学史料編纂所、写本(相国寺蔵版本を影写)

(請求記号)一〇三四 五九

外題「佛乘禪師東歸集 全」(題簽)

丁字色横刷毛目表紙

縦二六・八×横一九・二cm

無辺・無界・一面十行(一行二十字詰)

〔識語〕

(序の前に)別二報國本ノ影寫アリ此書ノ原本ナリ

(跋の後に)明治廿年一月京都府相國寺蔵書ヲ寫スノ花房五郎ノ丸山子堅

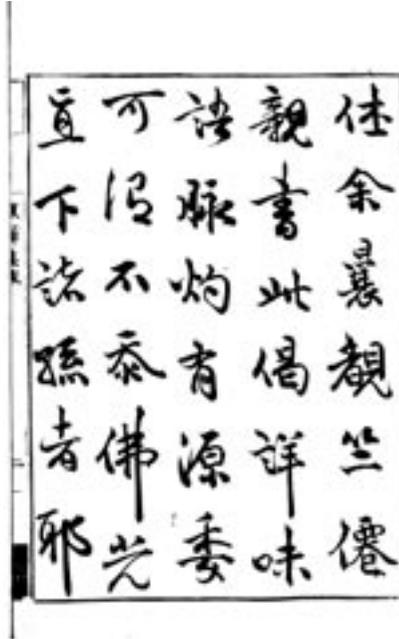
現存伝本一覽(『国書総目録』未収を含む) 〵 は前述の書誌情報と対応)

形態	所蔵機関	刊年	冊数	備考
影写本	東大史料	明治十九年影写	一冊	
影写本	東大史料	大正十一年影写	一冊	
伝自筆	鎌倉国宝館	鎌倉末〜南北朝初	一冊、 一軸	重文。所蔵元は報国寺。鎌倉国宝館で保管(寄託)。
① 版本	国会	元禄十六年	一冊	
② 版本	京大谷村	元禄十六年	一冊	
③ 版本	駒沢	元禄十六年	一冊	埋木有り。
④ 版本	駒沢	元禄十六年	一冊	埋木、書き入れ(注釈)有り。
⑤ 版本	茶図成篋	元禄十六年	一冊	埋木有り。
⑥ 版本	茶図成篋	無刊記	一冊	元禄十六年版と同版と思われる。
⑦ 版本	松ヶ岡文庫	元禄十六年	一冊	旧積翠軒文庫
⑧ 版本	長崎	元禄十六年	一冊	
⑨ 版本	報国寺	元禄十六年	一冊	埋木、書き入れ(注釈)有り。
⑩ 影写本	東大史料	明治二十年影写	一冊	元禄十六年版本の影写。京都相国寺蔵本写。
活字本	五山文学全集(一)	明治三十九年		
版本	鎌倉国宝館	元禄十六年	十枚	所蔵元は報国寺。鎌倉国宝館で保管(寄託)。

版本の刊記は「元禄十六癸未年ノ六月望前吉辰ノ京師二條通書林重兵衛刊行」と記され、すべて同一である。これまで版
 本は元禄十六年版しか存在しないと考えられてきたが、今回の調査で跋文には異同箇所が見つかった。現存する版本⁶を調査

したところ、該当箇所埋木を確認することができた（図参照）。これにより、版本は元禄十六年版に埋木をしたものと、していないものの二種が存在し、さらに無刊記本の存在が明らかになったため、少なくとも三種が存在することが分かった。巻末に伝本の系統図を付記したので参照されたい。

京都大学図書館・谷村文庫（元禄一六年刊）



駒沢大学図書館（元禄一六年刊後修）



『東帰集』の版木（鎌倉国宝館に保管される。所蔵元は報国寺）



それでは、いったい何故この跋文の部分に埋木をする必要があったのか。その点について考えてみたい。まず、跋文の全体は次の如くである。

【跋文】

佛乘禪師。早游中國。歷遍諸師門庭。獲聆其言論風旨。故發爲詩偈。率皆磊落瀟洒。句法峻整。大有過人處。讀其到岸偈有曰。脚跟下事非容易。一到地頭方始休。余曩覩〔竺僊／明極〕親書此偈。詳味語脈。灼有源委。可謂不忝佛光直下諸孫者耶。元祿癸未仲夏日

前主京城大徳比丘宗章拜手敬跋

〔龍睡〕

〔宗章之印〕

埋木の該当部分には、跋文を記した大徳寺二六八世の龍睡宗章が、天岸慧廣の詠じた「到岸」という偈頌を見た感想が記されている。竺仙梵僊あるいは明極楚俊の自筆の書物（親書）によってこの「到岸」の偈頌を見たところ、非常に優れたものだったという。

跋文に「余曩に〔竺僊あるいは明極〕の親しく此の偈を書するを覩るに」とある。「親書」というのは、竺僊あるいは明極のいずれかが自ら書いたという意味に解した。

この「到岸」という偈頌は、天岸慧廣が元から日本に帰る船中で詠じたもので、同船していた明極楚俊、竺仙梵僊、物外可什らと唱和したものである。これらの一連の作品は明極楚俊によって清書され、『滄海余波』と名付けられた。現在は逸して伝わらないが、その断片は「明極楚俊墨蹟 洋上詩（到岸）紙本墨書 掛幅装」として、福岡県の崇福寺に伝存している。

版木が「竺僊」から「明極」へと改められた理由は、版本上梓後に版本製作に関係した者が、この明極楚俊自筆の墨蹟を見てその間違いに気づき、訂正したものでなからうか。いずれにせよ、跋文中の「親書」というのは明極楚俊の自筆墨蹟

（「到岸」）であった可能性が高い¹⁷。

いつ埋木が施されたのかについては、埋木が確認できる前述の版本 駒澤大学所蔵本（書入れ本）に、この本を所持していた近江・千手寺（滋賀県彦根市日夏町）の義虔文義が「文政元年戊寅臘日、求之」と書き込んでいることから、文政元年（一八一八）冬には既に埋木が施されていたことが分かる。また、報国寺所蔵本（書入れ本）の奥書に記されている旧蔵者・澁頭陀なる人物が、序文を書いた月潭道澁（一六三六―一七一三）だったとすると、埋木が施された時期は版本（一七〇三）が刊行されて十年以内ということになる。

また、『国書総目録』に掲載されていない資料もいくつか確認された。東京大学史料編纂所に「神奈川報国寺蔵本写」の写本の記載があるが、厳密には明治期と大正期の二冊の影写本である。今回、お茶の水図書館（成篁堂文庫）にて「無刊記本」を発見したが、本文に異同は見つからなかった。刊記の部分には枠だけが存在し、枠内には何も記されていないが、本文を比較した結果、元禄十六年版と同版と考えられる。駒澤大学図書館の版本は一冊だけではなく二冊所蔵されており、そのうち一冊には精緻な書入れが施されている。そして鎌倉・報国寺には『東帰集』の版本（元禄十六年）が所蔵されており、さらに精緻な書入れが施されている。いずれも本格的に注釈を施した書入れ本にも関わらず、これまでその存在すら明らかになっていなかった。

三、伝自筆本と版本との比較から見えてくるもの

（一）配列の変更

「散文」（及び讃）を後半に移動し、部立を立てる。

伝自筆本には詩と散文が分類されていない状態で混在している。しかし、版本では別に項目を立てて散文（序及び小仏事、讚など）を後半部分に移動している。

作品内部の配列変更

一八五「次則長老山居十頌韻回之以一偈」は、合計十一首の連作だが、伝自筆本と版本を比較してみると、偈頌の配列が全く違つ。伝自筆本では五言絶句と七言絶句が分類されずに並んでいるが、版本はそれを詩の形式ごとに並べ替えたことが分かる。

(2) 消される偈頌と新出する偈頌

伝自筆本には存在するも、版本には収録されなかった十一篇

〔翻刻凡例〕

- 一、字体は原則的に底本の通りとしたが、一部改めたところもある。
- 一、難読の文字には 〇 を当てる。
- 一、底本で欠損している部分は 〇 を当てる。版本や影写本に欠損部分の文字が残っている場合には、内にその文字を記した。 〇 を注記した文字は疑問の残る文字で、欠損文字が推測される場合も 〇 を注記し（ ）内に表記した。
- 一、通読の便宜のため、私に句点「。」を施した。
- 一、見せ消ち、訂正等の箇所は、拙稿の翻字注を参照されたい。

配列 番号	詩題	偈頌
一	送紹藏住持普濟	<p>〇〇標榜憶古人、青原為瑞一角麟、信亦不通書不達、〇〇帰来〇理伸、 垂下足時直收取、端的何謬親〇〇、〇〇〇斧重千斤、荣枯伐尽及莽秦、 肩〇〇〇成開熱、誰家竈裏不生春、寥々千載〇〇〇、可憐麟趾深没塵、</p>

	足翁	火筋香匙閑却久、□□□□來下手、十字街頭三家村、東何有也西 □有、信手用時没人情、弥勒前兮积迎後、放三就兩休思筭、依然三々元是九、施耕奪食慈悲切、都是祖師真訓誘、臨行囑、莫孤負、格外句、缺面具一大歲教難詮註、睡虎還他隆藏主
二	雲溪	心絕希求何所欠、年來無物不相餞、惠而福也道而壽、喜見兒孫■滿朝 鬢髮覆陰劈箭流、牧牛人入洞門幽、幾時□兩從龍去、放出澗泉明月秋
三	送音侍者歸省本所及親二首(其一)	□□□□露一機、雪寒驚對白頭時、胸中五逆□□□、迴打爺拳打迺師
四	送音侍者歸省本所及親二首(其二)	花柳春濃如織成、毳衣變衣錦衣行、不須□□揩磨手、叢社忻逢二古靈
五	介翁	□先報春花信風、恰同持愈特來通、石頭接得□□斧、奪却相如金壁功
七六	秀公遺像贊 扇子念珠在手	現聲聞相兮蘊菩薩慈、聲色威儀兮不即不離、外教內禪兮一以貫之、仁于友于兮孝于親師、氣暢神融兮花綻春枝、情豁性質兮月印秋池、富貴開鎖兮生死路歧、如棄弊屣兮似斬寸絲、付在諸彥兮何慮其嗣、種衆善根兮等下生時、者个善根兮知也不知、一把扇子兮百八摩尼
一二一	為妙性禪門火 法灯小師	時節因緣無隙尔、吐金籬菊綻重陽、分明漏法掃根旨、攪斷黃梁客夢長、個人、識取天真自性、勦絕金鎖之難、直入法灯室、萬牛挽不回、处塵中難塵中、不懈怠不精進、貼々然有所養、佛祖無路近傍、天魔無門伺窺、理事縱橫□、右逢原喜開大施門長年飯雲水將得一平生恰似活衲僧時節已到、其理曰新一樣轉、洒然坐脱、只如■今、虛空崩裂、山岳起舞、天真自性■門主宰、也無擲火、試金以石、試玉以火
一三四	祖峰 (其一)	迦葉首伝從鷲嶺、弄花攀嶮勢參天、可憐賣峭少林客、振地深理熊耳前
一五七	鏡銘	觀面相呈、妍醜全露、鑑在機先、尚認无影、老廬尽力、道箇非臺、不知羅公、滿面慚惶、許尔打破

一七九	達磨	<p>□始有相見分、為銘日□□□、□鶴樓、明如日、鸚鵡洲、□□香、嚇</p> <p>崔尤、天岸<small>(字アキ)</small>□慧廣戲書</p> <p>西天東土果何布、恰值梁王按寶刀、一葦截流歸去後、長江千古浪頭高</p>
-----	----	---

版本に収録されなかった偈頌十一篇のうち、冊子本の巻頭に収められる四篇(一、三了五)と二四「介翁」、一五七「鏡銘」の二篇、計六篇は、大きさはさまざまであるが、欠損が見られる。これらの六篇は欠損部分があることから、版本への収録を諦めざるを得なかったと考えられる。

また欠損はないものに二二「為妙性禪門火」と一三四「祖峯(一)」の二篇がある。これらには作品全体を削除する見せ消しが記入されている。特に一三四「祖峯(一)」には注記に「未定」とあり、本文がまだ定まっていなかったことが記されている。版本はその指示に従ったものと考えられる。

残る三篇、二「足翁」、七六「秀公遺像贊」、一七九「達磨」は、欠損も見せ消ちもなく、版本に収録されなかった理由は判然としない。

版本には存在するも、伝自筆本には存在しない四篇

配列番号	詩題	偈頌
三一	送英千祐藏主婦潮陽	吼匣青蛇光射斗、従前妖怪一時除、龍宮海藏五千卷、不説昌黎祭鰐魚
三二	無心	趙州一字元非有、庭雪齊腰猶未安、知解雙忘縁慮絶、従它與道隔重門
一三一	送僧省母	去留切忌墮今時、萱草秋深却不知、端的報親消息子、洞山有者价闍梨
一三三	寄休禪人	成鏡何須磨碌磚、奔車元在打牛鞭、經行坐臥常三昧、佛法従他不現前

これら四篇の典拠を稿者は撰集に求めた。しかし、天岸慧廣の作品を収録する撰集は非常に少なく、管見の限りでは『遍界一覽亭記并偈』(一三三九)⁽¹⁰⁾と『本朝高僧詩選』(一六九三)⁽¹¹⁾のみで、いずれも一篇しか収録されていない。

調査の結果、以下の資料に天岸慧廣の作品は未収録であったので、その旨付記しておく。『百人一首』(横川景三)⁽¹²⁾、『北斗集』(明心七序)⁽¹³⁾、『花上集』(僧某、室町中期)⁽¹⁴⁾、『禪林雅頌集』(僧某、室町中期)⁽¹⁵⁾、『中華若木詩抄』(如月寿印、室町時代末)、⁽¹⁶⁾『翰林五鳳集』(以心崇伝編、江戸初期)⁽¹⁷⁾、『和漢高僧詩偈抄』(静庵観禅編、文化一四刊)⁽¹⁸⁾

他の禅僧たちの次韻や和韻などによって、天岸慧廣の名前は広く知られていたと思われる。しかし、多くの撰集が天岸慧廣の作品を収録しないという状況から考えて、江戸元禄期の版本の登場までその作品はそれほど多くの読者の目に入らなかつたと推測される。

版本にのみ存在する四首は、撰集などから取り上げたものではないと思われる。拙稿⁽¹⁹⁾で指摘したように伝自筆本は後人の手によって改装されており、その際に丁のいくつかが散逸した(あるいは既に散逸が始まっていたから改装した)と仮定すれば、これら四首が版本で新出することも説明できる。

(3) 詩題の変更

配列番号	伝自筆本	版本
一一	讚布袋	布袋二首
一二	雀贊	畫雀
一三	答高城卍字堂書并送筆謝惠茶	寄高城卍字堂三首
一四	寄高叟和尚靈岩隱居	寄高叟和尚
一五	觀音贊	觀音

九九	送感侍者遊宋国	送感侍者
一二八	翁庵主求老山頌	翁庵主
一八四	呈夢窓和尚賀惠林新寺	賀惠林新寺呈夢窓和尚
一九二	天山号	天山

一二、一三、八三は「讚」という部立にまとめられたため、ことさら詩題に「贊」を付する意味が無くなったと考えられる。

版本では六〇、六五、九九、一二八、一九二はすべて詩題の一部が削られた形になっており、多くは説明的な語句を削除している。

一八四は伝自筆本と版本の間で、語句が反転している。二〇二は「号」があることによって道号頌であることがはっきりと分かるが、それを説明的と考えたのであるうか。版本で「号」は削除されている。

(4) その他

配列番号	詩題	異同箇所	伝自筆本	版本
一〇	越山	勘破塊頭千載○僧	載	歳
二七	長水賈居士需語	居士門高謾○々○登	謾々	漫漫
二九	送同友歸徑山	百補年深○郷国衲	深	除
三三	寄呈雲門断江和尚	官感其詩得休○伐木	休	止
三五	礼石橋	邏齊綴○供四天下	綴	啜

一一六	寄然道二兄作成普濟胤別傳	然道顛勝 □ _(一字アキ) 符與化	(一字空白)	(空白を詰める)
一一〇	栢庭	借問西来是何意	(見せ消ち)	意
一〇九	丘侍者雪夜軸序	為当復打破蔡州城投得吳元濟耶	投	殺
		微公則幾乎自失	幾	是
		何暇有作而澆姓字于是非穿鑿之間乎	間	問
		日○時竹有聲	日	月
九六	贈謙無礙東行	主丈○頭辺鞋袋中	丈	杖
		直入千峰并萬峰有○仏処○今無仏処	有仏	(欠落)
		特地○煩君○須精窮	特地／煩君 (反転記号有り)	特地煩君 (反転せず)
		汾州休罷晚○搥○鼓	搥	搥
九二	無參	百○城烟水不干懷	百	萬
		赤間關改作寺次清拙和上韻	上	尚
九〇	赤間關改作寺次清拙和上韻	赤間關改作寺次清拙和上韻	上	尚
八八	斗山	看他○瞎却双瞳処	他	佗
八五	雲臺	登登還要極楷○梯	楷	階
七五	普濟寺安土地	檀門寺門永昌隆○	昌隆	隆昌
七四	闡提和尚五七忌拈香	譬如接○針之磁	接	(欠落)
六一	謝惠茶	停碗憶盧全○	全	同
三七	密庵祖師塔	只消一箇破沙○盆	沙	砂

一三三	月菴	自従 [○] 他 [○] 兔子 [○] 懐胎 [○] 処	従	(欠落)
一三六	次瑞光庵謙無礙韻	自従 [○] 他 [○] 兔子 [○] 懐胎 [○] 処	(見せ消ち)	他
一五〇	和鐵庵付衣松岳居士韻	明賣 [○] 真 [○] 鑰 [○] 暗 [○] 出 [○] 金	賣	買
一六九	明極和尚滄海餘波序	祖佛 [○] 伝来 [○] 無 [○] 第二	佛	師
一七一	雲菴	相従 [○] 之 [○] 者 [○] 三 [○] 四 [○] 明 [○] 之 [○] 仙 [○] 竺	之	(欠落)
一八四	呈夢窓和尚賀恵林新寺	対人 [○] 懶 [○] 堅 [○] 拳 [○] 為 [○] 枕	懶	嬾
		挿竹 [○] 識 [○] 如 [○] 符 [○] 契 [○] 合	竹	艸

文字の変更

伝自筆本と版本の間で最も多く見られるのが文字異同である。その例をグループ分けすれば、次のようなものである。

(1) 略字を正式な字に直した場合(九六「贈謙無礙東行」)、(2) 紛らわしい字の場合(二九「送同友歸徑山」、九二「無参」、(3) 訓読の際に解釈が異なった場合(三三「寄呈雲門断江和尚」、七四「闡提和尚五七忌拈香」、一一三「月菴」)など。全体的に見て、多くは一字程度の異同であり、伝自筆本と版本の間で詩句が大幅に変更される例はほとんど見られなかった。

語順が反対になる

七五「普濟寺安土地」、九六「贈謙無礙東行」では、語順が反対になる例が見られる。

文字の脱落

七四「闡提和尚五七忌拈香」、九六「贈謙無礙東行」、一一三「月菴」、一六九「明極和尚滄海餘波序」の四篇はそれぞれ、伝自筆本にはある文字が版本で脱落している箇所がある。

伝自筆本に訂正指示があるも、版本は従わない場合。

九六「贈謙無礙東行」、一一〇「栢庭」、一二三「月菴」の三篇では、伝自筆本に見せ消ちなどによる訂正指示があるが、版本がその指示に従わない例が見られる。例えば、一二三「月菴」は前述の「訓読の際に解釈が異なった場合」に該当する。一二三「月菴」は七言絶句であるのでその字数に留意しながら訓読しなければならぬ。「自」を補入と考えれば「風自従免子」となり、「自」を「従」の代わりに入れると考えれば、「風自他免子」となる。

四、伝自筆本の原態について

伝自筆本と版本の間に見られる違いは作品配列では顕著であったものの、それ以外で詩句が大幅に変更されることはあまりないことが分かった。ここでは、その作品配列について考えてみたいと思う。

明応八年（一四九九）の『報国寺文書』の記述²⁰から、伝自筆本は早い段階から一冊で、書名が『東歸集』であったと確認できる。しかし、中国からの帰朝を意味する「東歸」という題では、在元時の作品群は包含できない。例えば、別源円旨（一二九四～一二六四）は在元時の作品群を『南游集』、帰朝以後の作品群を『東歸集』という形でまとめている。

このことから天岸慧廣の『東歸集』の原態は、在元時の作品をまとめた一群と、帰朝以後の作品をまとめた一群とに分かれていたのではなからうか。伝自筆本には後人の手による改装が見られ、他にもいくつかの特徴的な部分があることから、伝自筆本の現在見られる配列と本来の配列は違つ可能性があることは既に指摘した。だとすれば、版本の配列というのは、実は伝自筆本が改装される前の配列に近かったという可能性も出てくる。

この仮説にもとづいて、伝自筆本のもともとの配列を考えてみたい。版本の配列番号を伝自筆本に重ねてみたところ、番

号が大きく離れるところと一定のまとまりを示す部分があった。この一定のまとまりが次の表である。(散文などが、版本では「部立」を立てて後半に移動されるが、これらはこの中に含まない。)

ブロック	製作地・製作年代	作品数	伝自筆本の配列番号	版本の配列番号
A (冊子本)	日本か	一六	一〇一～一〇六	一八四～一九〇、未収録(六作)
B (冊子本)	元	四三	一七〇～一七九	一〇四～一〇五
C (冊子本)	日本と元	九四	六〇～一五六	七四～一六一、未収録(三作)
D (冊子本)		一	一五七	未収録(一作)
E (卷子本)	元、帰朝時、日本	一六	一五八～一七四	四六～六四
F (卷子本)	日本と元	二一	一七五～一九五	(a) 六五～七三、未収録(一作) (b) 一六二～一七二

A 伝自筆本では、作品の序盤にもかかわらず、一六「成山」の後に不自然な余白がある。この「成山」という偈頌は、版本を見ると全体の九割を占める「偈頌」の最後に位置している。「成山」がもともと最後尾に位置していたならば、不自然に見えた余白も、これ以降に作品はないことを意味し、むしろ自然である。このことから、このAブロックは、改装される前の伝自筆本において、最後尾に位置していたと推測する。

また、冒頭の作品は丁のウラから作品が書かれ始めるが、そのオモテに中国からの帰朝を示す「東歸」の扉題がある(共紙表紙)。この扉題が存在することや、一五「戲寄夢窓和尚」(夢窓疎石は中国に渡っていない)などから、おそらく帰朝以後の作品群と思われる。

B 元禄版本に「已上在唐時作」として一つにまとめられている作品群である。これは別源円旨の『南游集』のような扉題が別にあつたのではないかと推測する。改装の際に(あるいはそれ以前に)、その扉題が紛失したのであろうか。だとすれ

ば、その扉題（共紙表紙）の裏に付随した作品がいくつか紛失したことにもなり、その中に版本に新出した三一「送英千祐藏主帰潮陽」、三二「無心」が含まれていたか。

C 現在のところ中国の作（十七篇）、日本での作（十五篇）が確認できる。道号頌などが多分に混在しているため、はっきりと断定できない部分もある。

D 「鏡銘」という一作品である。伝自筆本の中で唯一の著者の署名「天岸慧廣戲書」があることから、後人がこの部分を奥書として代用するため、巻末に移動してきたものか。『報国寺文書』三六一「法衣箱入日記」（一四九九）には「鏡 有銘 一面」とあるが、同三六一「報国寺什物失却帳」（コノ文書、未ダソノ年次ヲ詳ニセズ）に「同（開山）御鏡一面」とあるので、現在この鏡は散逸したものと見られる。

E 元禄版本に「已上在唐時作」とされる作品が二篇（一五八、一五九）含まれ、また偈頌の内容から帰朝時の船中詠のものが九篇（一六〇～一六八）含まれる。天岸慧廣らが帰朝した際、唱和した作品群をまとめて明極楚俊が清書した『滄海餘波』に天岸慧廣が序文を付した一六九「明極楚俊滄海餘波序」や、天岸慧廣が足利尊氏、足利直義に与えた道号²¹頌一七七「仁山」、一七八「古山」、あるいは夢窓疎石との交流を示す一八〇「甲州恵林適値祖忌作偈呈夢窓和尚」は明らかに日本での作と考えられる。

F ここに収録される作品群の上部には、一部墨点が振られている。これらを版本の配列通り、この後につなげるとどうであろうか。例えば、一八五「次則長老山居十頌韻回之以一偈」を一五六「雪溪」の直後に接続するのである。すると、一五六の上部にも墨点が振られていることに気がつく。現状では冊子と卷子に分断されていることFであるが、本来は非常に近接していたものと思われる。

五、結びとして

このように、現状の伝自筆本を版本に従って作品配列を動かしてみると、不自然であった部分が整合性をもつ例がいくつか見られた。未だその作品配列のすべてを解明できたわけではないが、少なくとも現状の伝自筆本よりも版本の作品配列の方が、『東帰集』の原態に近い可能性があることは示すことができたと思う。

これまで考察してきたように、版本は伝自筆本に忠実で、作品配列以外で重大な差違はほとんどなかった。そのような版本編者の態度を考えると、散文などを後半にまとめて移動したような部分は編者によるものとしても、版本編纂の段階で『東帰集』の作品配列が大幅に変更されたとは考えにくい。反対に伝自筆本は、文字そのものは仏乘禪師（天岸慧廣）の自筆と思われるが、後人の改装によってその配列は原態から大きく変更されていることは間違いない。だとすれば、『東帰集』の原態は現状の伝自筆本よりもむしろ版本の方にこそ色濃く残っていると稿者は考える。

この偈頌集が『東帰集』という名で呼ばれたことを示す文献を探してみると、その最も早いものとして明応八年（一四九〇）の『報国寺文書』三六一「法衣箱入日記」が挙げられる。ということは、著者である天岸慧廣が没した建武二年（一三三五）から明応八年（一四九〇）の「法衣箱入日記」の記述まで、一六四年という空白の期間がある。この一六四年の間に、「東帰」という題の他に、例えば「南遊」という題があったとしても不思議ではなからう。その証拠に伝自筆本の題箋には「東帰集 全」（傍線は筆者による）と記されている。これはもともとは複数のブロックに分かれていたことを示すものではなからうか。伝自筆本の原態は、例えば在元時・帰朝時・帰朝以後などのいくつかのブロックに分かれていて、その「区切れ」を示唆するものが、卷子本に見られる二つの著者印であり、冊子本・卷子本の両書に見られる作品上部に振られた墨点であったのではなからうか。これらは後人が改装（冊子と卷子に分裂）した際にその機能を失ったと考えられる。

- 〔註〕
- (1) お茶の水図書館（成實堂文庫）所蔵本（元禄十六年版本・無刊記版本）、松ヶ岡文庫（旧積翠軒文庫）所蔵本（元禄十六年版本）
 - (2) 北村澤吉『五山文学史稿』富山房、昭和十六年十月
 - (3) 日本古典文学大系八十九巻、岩波書店、昭和五十四年
 - (4) 「重要文化財『東帰集』（伝仏乗禅師自筆）」翻刻と解説、二松学舎大学COEプログラム機関誌「日本漢文学研究」創刊号、平成十八年三月
 - (5) 注4に同じ。
 - (6) 版本は昭和初期まで報国寺に所蔵されていた。現在は鎌倉国宝館に保管されている。版本を版本と比較すると二十五丁、二十八丁に対応する版本がない。一枚の版本（表裏）に四丁ずつ収録されているため、本来は十一枚の版本があったと思われる。
 - (7) 福岡県の崇福寺に明極楚俊自筆の墨蹟（洋上詩「到岸」）が存在すること、また、この自筆墨跡は平成三年度福岡市博物館特別企画展「図録『博多禅 日本禅宗文化の発生と展開』（福岡市博物館編集、平成三年十月十九日発行）の百二十八頁（資料番号九十九）によって確認することができること、報国寺の齊藤達雄氏、渡辺昌明氏にご教示いただいた。
 - (8) 巻末の詩題配列比較表を参照。
 - (9) 注4に同じ。
 - (10) 清拙正澄著『徧界一覽亭記并偈』東京大学史料編纂所蔵本（神奈川瑞泉寺蔵本写）、嘉暦四年
 - (11) 晦巖道熙編『本朝高僧詩選』内閣文庫蔵本、元禄八年版
 - (12) 塙保己一原編『続群書類従』十二輯上、続群書類従完成会、平成六年五月
 - (13) 塙保己一原編『続群書類従』三十四輯、続群書類従完成会、昭和四十四年
 - (14) 塙保己一原編『続群書類従』十二輯上、続群書類従完成会、平成六年五月
 - (15) 『禅林雅頌集』禅学古典選刊禅林雅頌集（仮題）／愛知学院大学附属図書館編、平成十一年
 - (16) 大塚光信・尾崎雄二郎・朝倉尚校注『新日本古典文学大系五三巻』中華若木詩抄・湯山聯句抄』岩波書店、平成七年七月
 - (17) 鈴木学術財団編『大日本仏教全書』第八十八、九十巻、昭和四十七年
 - (18) 静庵観禅編『和漢高僧詩偈抄』国会図書館蔵本、文化十四年刊
 - (19) 注4に同じ。
 - (20) 『報国寺文書』三六一、「法衣箱入日記」（鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史』史料編第三、吉川弘文館、昭和五十四年、所収）には、『東帰集』の書名があり、明応八年己未三月の段階で一冊だったことが記されている。
 - (21) 玉村竹二「足利直義禅宗信仰の性格」（『日本禅宗史論集』下之二、思文閣出版、昭和五十六年一月、所収）、堀川貴司「足利直義政治・信仰・文学」（『新古今集と漢文学』汲古書院、平成四年十一月、所収）

(22) 注4を参照。

〔附記〕

報国寺・菅原義久御住職には資料の閲覧ほか大変な御高配を賜りました。心より御礼申し上げます。また円覚寺・近藤喜一郎先生、報国寺・由井昇氏、渡辺昌明氏、齊藤達雄氏、鎌倉国宝館の内田浩史氏、二松学舎大学の高山節也先生、町泉寿郎先生、鶴見大学の堀川貴司先生に数々のご教示を賜りました。資料の閲覧及び複写に際し御協力いただきました関係諸機関の皆様にも深謝申し上げます。

本稿は平成十七年七月二十三日、学習院大学で行われた和漢比較文学会東部例会で口頭発表したものに基づくものです。席上、諸先生より有益なご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

伝自筆本の丁数	伝自筆本の配列番号	伝自筆本の詩題	版本の配列番号	製作地・製作年代	詩の形式	季節	墨点の有無
1ウ	1	送紹蔵主住普濟	なし	元	七言絶句	秋	
	2	足翁	なし				
2オ	3	雲溪	なし				
	4	送音侍者帰省本所及親 二首	なし				
	5		なし				
2ウ	6	無二	174				
	7	竹溪	175				
	8	瑞庵	176				
	9	指堂	177				
3オ	10	越山	178				
	11	龍淵	179				
	12	讀布袋	182				
	13	雀贊	184				
3ウ	14	介翁	なし	日本	七言絶句		
	15	戲寄夢窓和尚	173		七言絶句		
	16	成山	180		七言絶句		
4オ	17	次鏡堂古和尚作中峰和尚壽塔韻 三首	1	元 (1324-1329)	七言絶句	春	
	18		2	元 (1324-1329)	七言絶句		
	19		3	元 (1324-1329)	七言絶句		
	20	拜正續師祖塔	4	元 (1324-1329)	七言絶句		
4ウ	21	寄無傳受蔵主守香火正續院 二首	5	元 (1324-1329)	七言絶句		
	22		6	元 (1324-1329)	七言絶句		
	23	宿化城接待次清侍者韻	7	元 (1324-1329)	七言絶句		
	24	英山号	8	元 (1324-1329)	七言絶句		
5オ	25	鳥窠和尚塔	9	元 (1324-1329)	七言絶句		
	26	拜明教祖師塔	10	元 (1324-1329)	七言古詩		
	27	長水賈居士需語	11	元 (1324-1329)	七言律詩		
5ウ	28	遊囊中禪師虎跑泉	12	元 (1324-1329)	七言律詩		
	29	送同友歸徑山	13	元 (1324-1329)	七言律詩		
	30	宿鶴林寺寄呈息休長老	15	元 (1324-1329)	七言律詩		
6オ	31	寄龍山見首座催回郷	16	元 (1324-1329)	七言律詩		
	32	寄竺仙藏主在徑山	17	元 (1324-1329)	七言律詩		
	33	寄呈雲門斷江和尚	18	元 (1324-1329)	七言律詩		
6ウ	34		19	元 (1324-1329)	七言律詩		
	35	札石橋	20	元 (1324-1329)	七言絶句		
	36	遊天童	21	元 (1324-1329)	七言絶句		
	37	密庵祖師塔	22	元 (1324-1329)	七言絶句		
	38	常禪師荷衣沼	23	元 (1324-1329)	七言絶句		
	39	大慈山	24	元 (1324-1329)	七言絶句		
7オ	40	國清寺	25	元 (1324-1329)	五言律詩		
	41	韶國師塔	26	元 (1324-1329)	七言絶句		
	42	次韻寄見龍山催回郷	27	元 (1324-1329)	七言絶句		
7ウ	43	石隱 二首	28	元 (1324-1329)	七言絶句		
	44		29	元 (1324-1329)	七言絶句		
	45	送僧歸蜀	30	元 (1324-1329)	七言絶句		

『佛乘禪師東歸集』の基礎的研究

	なし	送英千祐藏主帰潮陽	新出 31	元 (1324-1329)	七言絶句		
	なし	無心	新出 32	元 (1324-1329)	七言絶句		
8 才	46	東禪	33	元 (1324-1329)	七言絶句	冬 冬	
	47	空山	34	元 (1324-1329)	七言絶句		
	48	法林	35	元 (1324-1329)	七言絶句		
	49	嶺雲	36	元 (1324-1329)	七言絶句		
	50	一峰	37	元 (1324-1329)	七言絶句		
8 ウ	51	棘林	38	元 (1324-1329)	七言絶句		
	52	月庭	39	元 (1324-1329)	七言絶句		
	53	月江	40	元 (1324-1329)	七言絶句		
	54	東峰	41	元 (1324-1329)	七言絶句		
9 才	55	遊何山道場	42	元 (1324-1329)	七言律詩		
	56	次雪村藏主関中韻	43	元 (1324-1329)	雑言古詩		
	57	辭融懶牛求滄海餘波序呈明極和尚	57	日本	七言律詩		
9 ウ	58	下関道中	44	元 (1324-1329)	五言古詩		
	59	過嚴陵臺	45	元 (1324-1329)	五言古詩		
1 0 才	60	答高城卍字堂書並送筆謝惠茶	74	元	五言律詩	春 夏 秋	
	61	謝惠茶	75	元	五言律詩		
	62	送筆	76	元	五言古詩		
1 0 ウ	63	桂巖	77	元	七言絶句		
	64	徳菴	78	元	七言絶句		
	65	寄高叟和尚靈岩隱居	79		七言律詩		
	66	雲庵	80		七言絶句		
1 1 才	67	題海棠花手卷	81	元	七言絶句		
	68	心源	82		七言絶句		
	69	別宗	83		七言絶句		
	70	布袋	183		詞		
1 1 ウ	71	信翁	84		七言絶句		
	72	中證庵	85		七言絶句		
	73	慶山	86	元	七言絶句		
1 2 才	74	闍提和尚五七忌拈香	185	日本	散文		
1 2 ウ	75	普濟寺安土地	186	日本	散文		
1 3 才	76	秀公遺像贊	なし			春	
	77	滿天	87		七言絶句		
	78	玉堂	88		七言絶句		
1 3 ウ	79	一源	89		七言絶句		
	80	劫石	90		七言絶句		
	81	宗元	91	元	七言絶句		
	82	心淵	92		七言絶句		
1 4 才	83	観音贊	181		詞		
	84	和普濟胤別傳韻	93	日本	七言律詩		
	85	雲臺	94		七言絶句		
1 4 ウ	86	平田	95		七言絶句		
	87	玉英	96		七言絶句		
	88	斗山	97		七言絶句		
	89	松堂	98	元	七言絶句		
	90	赤間關改作寺次清拙和上韻	58	日本	七言律詩		
1 5 才	91	次準孤標送玄了居士禮塔	14	元	七言絶句		

	92	無參	99		七言絶句		
	93	次韻謝竺仙惠茶	100	元	七言古詩		
15ウ	94	懶牛	101		七言絶句		
	95	壽峰	102		七言絶句		
	96	贈謙無礙東行	103	日本	詞		○
16オ	97	巨壑	104		七言絶句		○
16ウ	98	假山聚景	105		七言律詩		○
	99	送感侍者遊宋国	106	元	七言絶句		○
	100	信庵	107		七言絶句		○
	101	立翁	108		七言絶句		○
17オ	102	高山	109		七言絶句		○
	103	別峰	110		七言絶句		○
	104	通庵	111		七言絶句		○
	105	鏡庵	112		七言絶句		○
	106	遜庵	113		七言絶句		○
17ウ	107	題盆栢	114		七言絶句		○
	108	藤花	115		七言絶句		○
	109	丘侍者雪夜軸序	188		散文		○
18オ	110	栢庭	116		七言絶句		○
18ウ	111	物外庵口號	117	日本	七言古詩		○
	112	重用前韻答南禪座元	118		七言律詩		○
19オ	113	同	119		七言律詩		○
	114	同韻謝諸公賜唱和	120		七言律詩		○
	115	武州仁侍者相訪	121	日本	七言律詩		○
19ウ	116	霽然道二兄作成普濟胤別傳	122		七言古詩		○
20オ	117	巨川	123		七言絶句		○
	118	太虚	124		七言絶句		○
20ウ	119	静山	125		七言絶句		○
	120	高叟和尚惠布衫酬以扇子	126		七言絶句		○
	121	為妙性禪門火	なし				○
21オ	122	月潭	127		七言絶句		○
	123	月菴	128		七言絶句		○
21ウ	124	天山	129		七言絶句		○
	125	月堂	130	元	七言絶句		○
	なし	送僧省母	新出 131		七言絶句		○
	126	粉河觀音	132	日本	七言絶句		○
	なし	寄休禪人	新出 133		七言絶句		○
	127	示坐禪堂衆	134		七言絶句		○
22オ	128	翁庵主求老山頌	135	日本 (1300)	七言絶句		○
	129	那智山次石夢臆韻	136		七言絶句		○
	130	明室	137		七言絶句		○
	131	那智瀑泉	138	日本	七言絶句		○
22ウ	132	寄誓源月叟長老	139		七言律詩		○
	133	虎山	140	元	七言絶句		○
	134	祖峰	なし		七言絶句		○
23オ	135	祖峰	141	元	七言絶句		○
	136	次瑞光庵謙無礙韻	142	日本	七言絶句		○
	137	次清拙和尚奥境庵韻	143	日本	七言律詩		○

秋

『佛乘禪師東歸集』の基礎的研究

2 3 ウ	138	空谷	144	元	七言絶句		○
	139	黙堂	145		七言絶句		○
	140	青山	146		七言絶句		○
	141	魯山	147		七言絶句		○
	142	深雲	148		七言絶句		○
2 4 オ	143	次夢窓西堂寄明極韻	63	日本(1335)	七言絶句		○
	144	雪嶺	149	元	七言絶句		○
	145	照翁	150	元	七言絶句		○
2 4 ウ	146	和州庭下菊	151	元	七言絶句		○
	147	古庵	152	元	七言絶句		○
	148	天關	153	元	七言絶句		○
	149	基峰	154	元	七言絶句		○
2 5 オ	150	和鐵庵付衣松岳居士韻	155	日本	七言絶句		○
	151	遍界一覽亭	156	日本(1329)	七言絶句		○
	152	遊山寺	157	日本	七言絶句		○
2 5 ウ	153	寄夢窓和尚	158	日本(1333)	七言絶句	春	○
	154	東溪	159	日本(1333)	七言絶句		○
	155	石門	160	日本(1333)	七言絶句		○
	156	雪溪	161	日本(1333)	七言絶句		○
2 6 オ	157	鏡銘	なし				

卷子本

1	158	過蘭溪次韻	46	元(1324-1329)	七言絶句		
	159	越王臺	47	元(1324-1329)	七言絶句		
2	160	洋中設成	48	帰朝時(1329)	七言律詩		
	161	苦無風	49	帰朝時(1329)	七言律詩		
	162	搗風	50	帰朝時(1329)	七言絶句		
	163	喜見山	51	帰朝時(1329)	七言絶句		
	164	到岸	52	帰朝時(1329)	七言絶句		
3	165		53	帰朝時(1329)	七言絶句		
	166	過碧島	54	帰朝時(1329)	七言絶句		
	167	次竺仙藏主韻	55	帰朝時(1329)	七言古詩		
4	168	賀明極和尚東帰	56	帰朝時(1329)	七言絶句		
	169	明極和尚滄海餘波序	187	日本	散文		
5	170	中山	59	日本	七言絶句		
6	171	雲菴	60	日本	七言絶句		
	172	虚叟	61	日本	七言絶句		
	173	一岩	62	日本	七言絶句		
7	174	象先	64	日本	七言絶句		
7	175	別傳	65	日本	七言絶句	春	○
	176	安翁	66	日本	七言絶句		○
	177	仁山	67	日本	七言絶句		○

8	178	古山	68	日本	七言絶句		○	
	179	達磨	なし		七言絶句		○	
	180	甲州惠林適值祖忌作偈呈夢窗和尚	69		日本		七言絶句	○
	181	無等号	70				七言絶句	○
	182	次松澗居士枕流亭韻	71				七言絶句	○
9	183	松隱	72	元	七言絶句	○		
	184	呈夢窓和尚賀惠林新寺	73	日本(1330)	七言律詩	○		
	185 (1)	次則長老山居十頌韻回之以一偈	162 (1)		五言絶句	○		
	185 (2)		162(10)		五言絶句	○		
	185 (3)		162 (2)		五言絶句	○		
	185 (4)		162 (9)		七言絶句	○		
	10	185 (5)			162 (3)	七言絶句	○	
		185 (6)			162 (8)	七言絶句	○	
		185 (7)			162 (4)	七言絶句	○	
		185 (8)			162 (7)	七言絶句	○	
		185 (9)			162 (5)	五言絶句	○	
185(10)			162 (6)	五言絶句	○			
185(11)			162(11)	七言絶句	○			
11	186	宗山	163	元	春	七言絶句		
	187	幽林	164	七言絶句				
	188	次韻謝圓大虚提綱	165	七言絶句				
	189	次韵賀雲澤明極造壽塔	166	日本		七言絶句		
12	190	送鼻祖像寄與夢窓和尚	167	日本	七言絶句	冬		
	191	謝蘊道人雪中相訪	168		七言絶句			
	192	天山号	169	元	七言絶句			
	193	中庭	170	元	七言絶句			
	194	山堂	171		七言絶句			
	195	月叟	172		七言絶句			朱木印有 り